

SIMA (国際農業ビジネスショー)

後編



バイオマスエネルギーのプラントは施設が巨大なため、実物展示はできない。ジオラマやカタログが頼りだ。これから電力需要が高まる新興国からの来場者もエネルギー関連ブースで多く見かけた。

今年2月に開催されたSIMA（国際農業ビジネスショー）。40カ国から1,700あまりの企業が出展し、5日間で25万人弱を集めた。トラクタやコンバインの大型農機、作業機、収穫機だけでなく、エネルギープラントのブースも広がりを見せていた。後編は、技術情報を紹介する。

取材・まとめ／加藤祐子



3



2

- 1 YARA社のNセンサとサルキー社のブロードキャスト「ECONOV」シリーズ。トラクタの屋根に搭載し、走行しながら作物の葉色を測り、その結果を受けてGPSで位置を確認しながら自動で追肥量を可変制御する。
- 2 「ISARIA」はトラクタのフロントに搭載するタイプの葉色センサ。センシングと同時に追肥の可変散布が行なえる。
- 3 AgLeader社の葉色センサ「OptRx」。同社はGPSガイダンスや収量センサなどにも力を入れている。



1

同行した読者に聞いたところ、海外の展示会を歩けば世界の農業技術のトレンドを肌で感じることができるといふ。早速、フランス語で新しいを意味する「ヌーボー（Nouveau）」と書かれた商品に注目した。

まず、GPSと連動した作業機のラインナップは充実していた。プロードキャストには施肥が重ならないようにスピナーやシャッタを自動制御する機能。さらに、葉色センサと連携して、窒素肥料の追肥量を可変制御する精密農業に対応した機種も標準的になりつつある。スプレイヤはブームをいくつかのセクションに区切ってノズルを制御することで散布幅を調整する。今後は作業機ごとにキャンビンに搭載するコントロールパネルの集約に注目したい。

トラクタやコンバインは、エンジン性能を高め、デザイン性やオペレータの快適性を意識している。一方、耕うん作業機は未だに幅広の全面耕起タイプが大勢を占める。播種する畦のみ耕起する部分耕起は、エネルギー大国であるフランスにはまだ浸透していないようだ。

今回の展示会に限らず、世界的に農機業界を活気づけているのは新興国市場である。既に数年先まで受注が決まっているメーカーもあり、市場開拓が進んでいる。



- 4 ニューホランドのコンバインの初期モデル。刈り取りヘッダのチェーンやベルトがむき出しで、キャビンなし。
- 5 最新のニューホランドのコンバイン「CX8090」。洗練された丸みを帯びたデザインが秀逸。
- 6 IDSAA社のトウモロコシ収穫用のヘッダ。コンバインメーカーの純正品以外にヘッダ専門メーカーもラインナップが豊富。
- 7 クーン社の部分簡易耕真空播種機「MINIMA2」。前作の刈株が残ったままの不耕起圃場で播種する畦部分のみを耕して大豆やコーンの種をまく。全面耕起に比べて省力できる。
- 8 作物の生育状況をセンシングするロボット。作物畦間や高さに合わせてロボットの高さ、タイヤ幅を調節できる。アマゾーネ社がボーシュ社や大学などと共同開発している。
- 9 ITツールを提供するISAGRI社のブースは若者に人気だった。スマートフォンやコンピュータ画面で作業情報を記録したり、地図ベースで作業計画を立案するシステムは来場者が実際に触れられる。
- 10 グリメ社2畦ハーベスタ「GT170」。広いブースにハーベスタやプランタ、ロータリヒラーなど豊富なラインナップを実機展示は圧巻だった。